

---

# 擬人化物語

緋笠 幻夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

擬人化物語

### 【Nコード】

N5616R

### 【作者名】

緋笠 幻夢

### 【あらすじ】

とある中学校に通学する主人公、中井優生が帰り際に拾った猫が擬人化！？その後もどたばたが続くコメディー(?)

…です。

## プロローグ（前書き）

しょーこりもなく始めましたw

正直皆さんが読んでくださるか不安です（笑）

駄文ですがよろしくおねがいます！

## プロローグ

ここは桜咲中学校。校門の周りには美しい桜がありとても華やかに見える。

俺、中井優生はその桜のなかでも一際大きい桜の下でいる。校庭には数人の生徒がいるがやはり今日が入学式と言うこともあってほとんどが校内にいる。俺？俺の入学式は去年だったよ。つまり今は中2だ。

「あー！やっぱりいた！」

「んん？…なんだ、夏生か、」

「夏生かって何よ？それよりもうすぐ入学式が始まるから早くいこー！」

「もうそんな時間か。もう少しゆっくりしたかったが…しゃあない。」

「それじゃいこ」

紹介が遅れたがこいつは桜井夏生、俺の幼馴染みだ。馬鹿で子供だが可愛げはあるやつ。

そして名前に同じ『生』が入ってるのはなにかの陰謀だと思っている。

教室に入ると、

「優生！いいかげんその眼帯をとりなさい！」

そうそう注意してきたのは俺たちのクラスの担任である小川渚、超ロリ体型だがれっきとした25才。俗に言う合法ロリというやつなのだろう。

「いやです。先生だって俺が眼帯してる理由しってるでしょ？」

「知りません。とりあえずその眼帯を取りなさい！」

知らないのかよ…

あ、俺が眼帯してる理由はへんな特殊能力があるとかじゃなくて単にオッドアイを隠したいだけだ。右目が蒼で左目が黒で右目の方を隠してるというわけだ。

「どーでもいいけど早くしないと入学式始まつちゃうよ？」

「えっ？・・・き、きゃあああ！みんな、大至急体育館に行つて！入学式が始まつちゃうわ！」

それだけというと先生は文字通り俊足でどこかにいった。

「・・・んじゃ優生がまとめて、」

「何故俺？」

「だって一番束ねるの上手いし。」

クラス全員がうなずく。・・・ちっ、

「はあ…しょうがないな…とりあえず廊下にならんで。ほら、早く。」

みんなが並んでる間にさつき先生に突っ込みをいれたやつと俺に押し付けたやつを説明しよう。

突っ込みをしたやつは川澄滝利、友達で常にハイテンション。こいつのテンションが低くなったりするのは滅多にみない。

もう1人の押し付けた方は山本厚志、喧嘩仲間でもあり友達でもある。ボウズな上にサングラスが好きという。エグ○イルのあ○しに激似w

「優生く並んだよ〜」

「そんな大声で叫ばなくても聞こえてるっちゅーの…んじゃあとは頼む。」

「はいはい。」

ちなみに今話しかけたのはクラスの委員長だ。委員長をいいんちよと妙に略されて呼ばれてる。理由？知らない。

「え〜…本日は見事なまでの快晴云々…」

くだらない話を長々と話す理事長。

もとい俺のじいちゃん…

「しっかし長いな…いつにもまして、」

「ああ…だりい。」

滝利が小声で話してきた。確かに長い。いつもは10〜15分くらいだが今日は30分以上話してる。よく話のネタが尽きないな。

「…というわけで話を終わります。」

「あ、終わった。」

結局あれから10分ぐらいして校長の話は終わった。

「…それでは今日の授業を終わります。じゃ、みんなさいなら〜」

またしても俊足で帰った先生。なんでそんなに急いでるんだ…

「はあ…帰るか。」

「優生つて…いねえ。」

滝利にみつかるといういろいろとめんどいからな。早めに帰る。

部活は一応バレー部なのだが今日から一週間は休みだ。家でゆっくりしよう。

…と思ったが確か委員長に呼ばれてたな。…たりに

「でもフケたら仕返しが恐いからな…行くか。」

自慢じゃないが一度委員長から呼ばれてたのを無視して部活にいったら精神的にきついことをやられたからな…

何かって？いえるかなこと、

「あ、いたいた。」

「委員長…」

「まだ委員長っていつてるのね…いいんちよで良いつていつてるでしょ？」

「仮にもクラス委員の貴女をどっかのアニメみたいに呼べませんで、」

「むづ…まあいいわ。それより、」

「はいはい…」



「……………」

何してるかって？

ただ眼帯をとってオッドアイの目で見てるだけだ。

見せられてるって言うほうが正しいかな、

「ん…もういいよ。」

「ふう…慣れない両目を使うのはちときついな。」

俺がしはじめたのは小5あたりからだ。軽いいじめもあったが返り討ちにしてやった。厚志と一緒にな、

「んじゃ、一緒に帰ろっか？」

「拒否したら？」

「前よりもっと酷いことをするまでよ…」

「…はあ。しかたないですね。行きましょつか、」

「やった」

別に女の子と一緒に帰るのが嫌いなわけではないが他の輩に彼女と勘違いされるのが面倒なのだ。

まあしばらくは彼女は作らないと公表(?)してるから大丈夫だろうが…

「ねえ、聞いてる?」

「へっ!?!」

「…ぶふ。そんな声もだせるんだ。」

「そりゃ出せますよ…人間ですし。」

「それもそうね〜。あ、猫だ!おいで〜」

「にゃ〜ん。」

トコトコ…スリスリゴロゴロ…

「…俺?」

「にゃ〜ん」

「じつちにおいで〜」

トコトコ…

シヤッ!

「いたっ!」

「大丈夫ですか？はいこれ、」

非常用の絆創膏を渡した。

「あ、ありがとう。…どころやら私は嫌われてるよね。」

「フー！」

「はあ…優生君、あとはよろしく。」

「あっはい。」

そついうと委員長は自分の家に入っていった。

「さて…とりあえず家にくるか？」

「にゃん」

分かったのか…？とにかく家に連れて帰った。

「ただいまー」

誰もいない我が家と言う。

…あ、こいつもいたな。

「とりあえずご飯と寝床とトイレの確保…だな。」

冷蔵庫には、

- ・牛乳
- ・キュウリ
- ・トマト
- ・卵
- ・牛肉
- ・その他調味料…

改めて思うがすくねえ…猫のご飯もあるし…

「買い物に行くか」。たりいな。」

「じゃ〜ん。」

あ…こいつもいたな。

「どつしよつか…そつだ。」

管理人さんに預けてもらおう。

遅れたが俺は独り暮らしだ。理由は両親が大企業の社長で忙しいから仕送りだけもらって独り暮らしにしているのだが…

仕送りが月百万近くある。逆にあまるっての…

一軒家は広すぎるのでマンションにすんでるのだがこのマンションの管理人がいい人なのだ。

きちんとしつけをすれば基本ペットはOKだし各部屋もなかなか広い。大体1部屋が畳三畳の部屋が2つ〜3つある。

∴借りられる人数が少ないのが欠点だが、

「管理人さん。ちょっといいですか？」

「なんぞ〜？」

「こいつを預かってほしいんです。」

「あああ、預かる！？何を！？」

「猫です。」

「へ…？？」

「にゃ〜ん」

「あらほんと。飼うつもりなの？」

「管理人さんが許可してくれるなら、」

「しつけさえちゃんとしてくれればいいよ。∴でもなんで預けるの？」

「ちょっと買い物に行くんで…」

「なるほど…んじゃ、行つてきな。」

「ありがとうございます。あ、そいつかなり乱暴ですので注意してください。それでは、」

「え…?」

シャツ!

「いたあ!」

管理人さんの叫びを無視して買い物に行く。

あ、管理人さんは男だから。女ではないぞ。

『スーパー 浜屋』

よくいくスーパーだ。浜とついでるが海産物だけでなく肉や野菜。ペット用品にとどまらずゲームセンターまである。もうスーパーの域を越えてる気がする。

「とりあえず今夜の飯とペット用品を…」

「おらあ!てめえ喧嘩売つてんのか!?」

「べ、別に売ってなんて…」

「兄貴、こいつら生意気ですなあ？」

「ああ…だが俺は優しいから今もってる金全部くれたら許してやるよ。」

「流石兄貴！ やっさしい！」

ああ…典型的なカツアゲだな。…最近暴れてなかったな。

「すみません。ちょっといいですか？」

とめるために入りましたよ。敬語でw

「ああ！？なんだてめえ！？」

「誰でもいいでしょう…それより今時カツアゲなんてダサいですよ？真面目に働いて稼ぐっていう考えはないんですか？」

「生意気だな…よし！お前ら！こいつを先にしめるぞ！」

「」「おっ！」「」

相手はリーダー格のやつを入れて3人が…

「おらあー！」

1人が顔を殴ろうと襲いかかってくるのを最小限の動きで避け顔に一撃をいれる。

「がつ…」

バタ…

一撃で倒れるのか…つまんないな。

「「てめえ!」「」

こんどは二人同時か…多対1は嫌いなんだが

「なっ!」

「えっ!」

何をしたかって?

相手の視界から消えたただけだ。もっともまわりこんだりするのではなくしゃがんだただけだがな、

そこから足払いをしこけさせる。

そして眼帯をとり上から睨み付ける。

「ヒィ!」

「ここから消えてくれれば危害は加えない…もし逆らったら…」

「「すすっすいやせんでしたー!」「」



「…ふう。」

眼帯をつけてカツアゲされていた2人に話しかける。

「大丈夫か？」

「あっはい。大丈夫です。あの…ありがとうございました…」

「気にしないでいいさ。んじゃ、気を付けてな、」

「やつべえ…遅くなっちまった。」

喧嘩で時間かけすぎたか？

「管理人さん、遅れてすいません。」

「おお…やっと帰ってきたか…あとはよろしく…」

バタッ！

「うわぁ……」

引っ掛かれた傷跡が半端じゃない。猫って恐ろしい。

「にゃ〜ん」

「またせたなんじゃ飯にすつか？」

「じゃあ〜ん」

今日のご飯は、

・野菜炒め

・ご飯

・漬物

質素…

猫は

・キャットフード

・水

ネットにあったのだがミルクは多量にあたえては駄目らしい。なので水。

食べ終え、風呂からでて寝る準備をする。

「じゃ〜ん?」

「一緒に寝たいのか?」

「じゃん!」

「そうか…この際名前も決めるか、」

白い猫……白猫……白……雪（え

「雪でいいか？」

「じゃあくん」

「きにいってくれたか。それじゃ雪、一緒に寝ようか。」

新しく一緒にすみ始めた猫。雪と一緒に寝て、今日は終わった。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

次から後書きを使ってキャラクター説明をしたいと思います。

第1話・・・猫？（前書き）

まだ1話（数的には2話）なのに約八千文字（？）（あるってどうよ  
）（・・・）

第1話・・・猫？

「んん…」

朝日が眩しい…

そして俺の目の前には、

「スー…スー…」

可愛らしく寝息を立ててねている女の子がいる…しかも全裸で、

「ううん…ん…」

不味い！起きた！

「……………」

「……………」

「…ご主人さまー！」

「ひでぶっ！」

ちよつとまで、ご主人様!?

「ご主人様って誰だ…その前に離れる。」

胸が当たってるっての…

「ご主人様はご主人様だよ」

「質問の返答になつてねえ…」

「これでもわからない?雪だよ」

「……は?」

「ご主人様が昨日拾ってくれた猫の雪だよ」

「……」

サワ…

「にゃん!」

この猫耳と尻尾も本物っぽいな。

「にゃあん…ご主人様…」

色っぽい声だすなよ…

「おっと、すまんな。」

「いえ、それもあるんですが…」

「な、なんだ？」

「お腹空きました…」

「…その前に服着ろ。」

目のやり場にこまる。

「わかりました〜」

「今の内に着替えるか…ついでに買い物か。」

幸い今日は土曜日。雪の服を買わなきゃな、

「ご主人様〜？ちょっと来てください〜」

「なんだ？」

ドアをあけると…

「服ってどうやって着るんですか？」

「わわっ！」

バタン！



「ちょっと！なんで閉めるんですか！？」

「とりあえず隠せ！」

「どこをですか！？」

「ああ〜もう！体を隠せ！」

「わかりました〜」

「あぶねえ……」

全裸のまま呼ぶな……

「いいですよ〜」

「……………」

カチャ……

「ふう……」

「はやくはやく〜」

「はいはい。これをこおして……ここに手を通せば……」

「着れました！ありがとございますご主人様」

「ご主人様はやめろ……俺の名前は優生だからな、あとメイド口調も禁止。」

「わかった！優生」

「はあ…先が思いやられる…」

飯を喰って雪はテレビをみていて俺は片付けをしている。

「終わったか…んじゃ、雪、出掛けるぞ。」

「どいどい」

「服屋だ。お前の服を買いにいくんだよ。」

「え〜。私はこのままでいいよ〜、優生の匂いがするし」

「俺の匂いつてなんだよ…まあいいか。いくぞ。」

「ちょっと、まってよ〜」

## 商店街

## 西繁屋

服屋だ。コスプレ等の服を除けば大体の服はそろつ。

「優生、早く入ろ〜」

もちろん猫耳は帽子で隠し尻尾も服の中にしまえさせた。

「へいへい。」

「…こんなとかどうかな？」

「自分で決めろよ…」

「やだ！優生が決めたのがいい！」

「なんでだよ…まあいいか。」

あいつの髪が銀色に近い白というなんとも分かりにくい色だからな…白だったらよくわからなくなるな…

「んじゃ、これ来てみて。」

「はい」

「じゃーん！どお？」

「……………」

可愛い…

俺が選んだのはピンクを基調とし蒼をワンポイントのようになっているワンピースだ。

「…うん。まあ、可愛いよ。」

「ほんと！？よかった。」

「んじゃあとは自分の好きなのを買ってくれよ。」

「わかった〜」

その後雪が選んだ服と俺が選んだ服と雪の下着をレジにもっていき会計を済ませた。

「お腹すいた〜」

「もう昼か・・・なんか食ってからかえるか？」

「うん！」

近くのパスタ屋に入りカルボナーラを2人分頼んだ。

雪の服は俺が選んだやつをそのまま着ている。下着も店の人に頼みその店の着替えるばしょで着替えさせてもらった。

しばらく待つと、

「あ！この前の！」

「ん…ああ。この間の…」

「優生？知り合い？」

「いや、お前を拾った時に買い物にいったら？あの時にカツアゲさ

れてたのを助けたんだ。」

「はい！先日はありがとうございました！あ、私咲中の佐伯弓です。こっちは妹の真矢、」

「こんにちは！僕真矢つていいいます！」

妹は僕っ娘か、今時珍しいな

「ってか…咲中に佐伯なんて名字あつたっけ？」

あと咲中とは桜咲中学校の略だ。

「私たち新入生なんです。」

「なるほどな。俺は優生、こっちは雪っていうんだ、よろしくな。」

「「えっ！」」

「ど、どうした？」

「「もしかして中井優生さん！？」」

「あ、ああ。フルネームはそうだが…」

「うわー！本物だ！」

「ね、ね、眼帯とつてもらってもいいですか？」

「いいが…まず落ち着け、あとなんで俺のフルネームを知っている

「？」

「そりゃあもう独眼の優生って有名ですから！」

伊達政宗かよw

「かつこいいし喧嘩も強いし優しいし…はっあ〜」

「かつこよくなえよ、優しくもねえ。」

「またまた〜」

「ほんとだ、それより後ろ、」

「「へっ？」」

「お、お待たせしました…」

「「こちらこそ、すみません。」」

「「すみません！」」

「「いえいえ、ではごゆっくり、」」

「「お腹すいた〜、いただきます！」」

「「僕たちも一緒にいいですか？」」

「「ああ、構わないよ。」」

「やった！」

「メニュー決まってるのか？」

「あと1人来ることになってるんですけど…あ、きました。」

「やつほ〜！弓ちゃんに真矢ちゃん！」

「ぶっ！」

「こんにちわ〜」

「やつほ〜」

「およ！？優生じゃん！…てめえ、」

「なんだよ？滝利、」

そう、きたのは滝利だ。いつのまに後輩と仲良くなってんだよ、

「いつのまに彼女作ってんだ！？」

「は？…ああ、こいつ？」

「そうだ！しかも可愛いし…裏切ったなー！」

「までまで、なに勘違いしてんのかしらんが雪は彼女じゃねえ。」

「」「ええっ！呼び捨てにしてるのに！？」」「」

ハモるな、きめえ

「じゃあなんなんだよ!？」

「ただの友達だったの、」

「なんだよ…びっくりさせんなよ」

「「まったくです。」」

「お前らが勘違いしたんだろが、」

「うるせ、」

「あゝそろそろ注文してもいいですか？」

「いいぞ。」

何故に上から目線なんだ滝利よw

「じゃ僕ナポリタン！」

「私も！」

「んじゃ俺はカルボナーラで、」

「なぜ俺たちと一緒に？」



「なんか昏そうだったから」

子供かw

「はあ…言っとくが各自自腹な」

「「「「えっ!?!?」「」「」

「雪はしゃあないから払うぞ。」

「よかつた」

「奢ってくれないの!?!?」

「当たり前だバカ。」

「ガーン…」

「「「……………」

「な、なんだよ。」

涙目で上目遣いやめる。佐伯姉妹よ

「「「……………」

「…はあ。今回だけだからな、」

「「「「やった!」「」「」

「滝利は自腹な、」

「ガーン…」

ザマアw

その後は各自頼んだメニューを食べ終えてレジにて4人分の代金を支払った。滝利は別な、

「流石に…出費がきついな、」

「またまた、貯金あるんだろ？」

「うるせえ、しばくぞ。」

「サーセン。」

なんとも謝罪の気持ちが感じられなかったのでしばく。

バシィ

「いたあ！お前何気にバレー部のエースなんだから叩くな！」

「その俺のスパイクをレシーブしてるお前が言うな、」

「ぐぐぐ…」

「これからどうします？私たちは買い物に行くんですが…」

「俺はいいが…雪がなあ」

「私なら大丈夫だよ！」

「そうか、しんだかったら言えよ、」

「うん！」

「…どうみても彼氏彼女にしか見えない、」

「あいつはな、女子にたいしてはいつもあんな感じなんだよ、オマケに眼帯をとった時はイチコロさ、」

「うわぁ…でも眼帯とってる姿みてみたいな、」

「部活中とか風呂に入るときならばすらすらしいな。見たかったら部活中にこいよ、」

「お風呂…」

ボンッ！

「真矢？」

「はづっっ」

「何を想像したんだ。」

「やぁ…」

「俺たちもいいぞって…なんで真矢は気絶してんだ？」

「優生さんのお風呂…キユウ」

「何を想像してんだ…」

「ちゅあ…」

「あ、親分こいつす!」

「おう!そこの眼帯してるやつ!俺の子分をいじめたらしいな…借りは返すぜ?」

「な、何だ!?!」

「おお!この前の嬢ちゃんたち!」

「ひっ!」

「あゝ、この前の…」

「おら、面貸せや…やるうじゃんかよお!」

「チツ、」

今避けたら滝利たちに当たるな…

「おらあ!」

バキィ!

「ぐっ…滝利、雪達を連れて逃げとけ、」

「お、おう。わかった!」

「逃げたぞ! 追え!」

「させるかあ!」

バキ! ドス!

「がっは…」

「鳩尾を的確に蹴るとは…やるな、」

「好きで強くなったわけじゃないが…これでタイムマンになったわけだ。」

「ふん、多対1は苦手か?」

「まあな、…それより、やらないのならやめるか?」

「やめるかあ! くらえ!」

バツ

「そんな鈍い飛び蹴りなんてあたらないな、はっ!」

ドスッ!

「うぼあ!…!」

手応えはあったが…

「流石に倒れねえな、」

「伊達に親分って呼ばれてないからな…そらっ！」

ヒュン！

「うおっ！刃物なんて反則だろ！」

「うるせえ！勝てばいいんだよ！」

ヒュンヒュン！

スパッ！

「ぐっ…」

「手に傷が出来たなあ？」

「こんくらいなんてことねえよ…おらっ！」

ドスッ！

「がっ…」

鳩尾を殴りナイフを奪い川にすてる。

「しまいだ…消えな！」

「がっはあ！」

綺麗に吹っ飛んだ。

「親分がやられたあ！逃げろお！」

「」「」うわあああ！」「」

蜘蛛の子を散らすように子供達はきえた。…さて、

「次に何かしてきたら…本気でぶつとばすからな、覚えときな。」

「へっへえ！」

そう言うと脱兎のごとく逃げた。

「滝利達は無事かな…携帯で連絡するか、」

トゥルルルル…トゥルルルル…

ピッ、

『優生！無事か？』

「なんとかな、それよりそっちは？」

『こつちも大丈夫だ。今俺の家にいるからこい。』

「了解。」

電話をきり滝利の家に行く。

商店街

「おお、優生君！滝利なら自分の部屋にいるよ。」

きてそうそう話しかけてきたのは滝利のおとうさんだ。

「ありがとうございます。」

礼をいい滝利の部屋に入る。

「優生！」

「大丈夫でしたか？」

「…傷ついている。滝利さん救急箱を」

「了解。」

「なんだなんだ勢揃いな、」

「当たり前じゃん！皆凄く心配したんだから！」

「そうですよ！…怪我もしてるし、」

「ん？ああ、刃物を持つてるとは思わなかったからな、」

「ええ！？大丈夫なんですか！？」



「まあ果物ナイフだったし刺されたんじゃないかってかすって斬られたって感じかな、」

「あいよ。弓ちゃん、救急箱。」

「ありがとうございます。さて優生さん、傷を見せてください。」

「治療か？」

「はい。これでも上手い方だと思います。」

「わかった。ほら、」

「……………」

思ったが弓の治療は凄かった。

「お姉ちゃんは将来医者になりたいらしいの。だから医療には詳しいんだ。」

「へ、弓にそんな夢が。」

「私は…ただ救える命を救えるよう最善を尽くすだけです。」

「なんかそれっぽいな、」

「そうですね？」

「ああ。治療ありがとな、あともう帰ってもいいか？」

「「「えっ!?!」」」

「別に嫌なわけじゃないからな、ただ雪がな…」

「「「……………」」」

「スー…スー」

「寝てますね、」

「疲れたんだろう。家でゆっくりさせたいんだ。」

「そういえば…雪さんの家ってしってるのか？」

「えっ!?!」

不味いぞ…仕方ないとはいえ同棲してるのがバレたら厄介なことになるな…

「う、うん! まあしってる!」

とりあえずはぐらかしとけ、

「んー…わかった。家で休ませろよ。」

「サンキュー。んじゃ、3人ともまたな、」

「はい! また明日!」

「傷口にあまりさわらないでくださいね。」

「おう。」

滝利の家を出た後自宅にもどり雪をベッドにおろしてから自分も寝た。

## 第1話・・・猫？（後書き）

中井 優生 ナカイユウキ

性別 男

身長 169センチ

体重 64キログラム

髪型 黒の短髪

性格 クールキャラでいきたいが：無理なようだ。

好きな&得意な事 音楽観賞、月を高台からみたり、バレーボール

嫌いな&苦手な事 うるさすぎる場所 勉強

その他：左目に眼帯をしている。理由はオッドアイの目を隠すため。本人は自覚がないがかなりのイケメン。眼帯をとり見つめれば大抵の女子はイチコロ。こいつ目当てに女子バレーに入るやつもいたりいなかったり。勉強は中の中

## 第2話 マタタビの力(前書き)

人物紹介で色々と抜けている気がするW

## 第2話 マタタビの力

「ふわあ〜…ねみい」

「あ、おはよ〜」

「雪…」

ポカッ、

かなり力をぬき叩く。

「ふにゃ！何するの！？」

「お前なあ…疲れて寝るくらいならあんどきに言えよ、…内心心配したんだぞ、」

「でも…優生なんか嬉しそうだったから、私のために別れると思ったら…」

「別に週明けには会えるから気にしなくていいんだぞ。ってかそんなに嬉しそうだったか？」

「うん。」

俺はあんまり笑わないと思う方なんだが…

「顔笑ってたか？」

「ん〜、笑うというより微笑んでたよ。」

「そうか。」

微笑むなんてしてたのか。

「それより優生、これから何するの?」

「そうだな…買い物に行くか、買いだめしてなかったし。」

「わかった〜」

スーパー浜屋

「優生!優生!これかって!」

「子供か…んで?」

「これ!」

マタタビ…

「猫の本能か…?」

「さあ?」

「おいおい。とりあえず買ってみるか、」

実際どんな反応するのか気になるw

「やったー！」

「んじゃ、あとは…」

リンゴに豆腐、ブロッコリー。米に麦茶etc…

「こんくらいか、」

「結構買ったね」

「明日明後日の分も買ったからな、」

「ふん。」

会計をし、帰宅。

「うわー！美味しそう！」

「よだね、ちゃんと吹いとけよ。」

「にゃ…あ、ありがとう。」

「…ふづ。んじゃ食べるか。」

「わーい！いったただっきまーす！！」

「…」



雪の食べっぷりはすごい。もぐもぐじゃなくてガツガツバクバクって感じた。

女の子としての品の欠片すら感じられないような食べ方だった

「おかわりー！」

なので食費もハンパない。

「太るぞ？」

デリカシー無いと思うな、

「にゃ！…しよ、しよがにゃいか、」

「うむ。あとでマタタビあげるから我慢しとけ、」

「ほんと！？じゃあ我慢するー！」

飯が終わり片付けをして、一段落ついたところでマタタビを探す。

「え〜と…あつたあつた。」

「はやくはやく〜」

「まてまて…ほれ、」

粉末状だったので小皿に移し、雪の前に置く。

「にゃあ〜ん」

猫耳がピンと立ち尻尾もいつもよりふりふりしている。

スリスリ、ゴロゴロ

「…猫に戻ったみたいだな。」

「にゃーん」

カプツ

「いつ…たかないわ。甘噛みか？」

「にゃふ〜ん」

「はあ…まあいいか。」

その後は15分くらい甘噛みをやられてた。痛くはないがなんかくすぐりたい。

「ふにゃ…優生？」

「ああ…どうだった？」

「なんか…優生にめいっばい甘えてたような気が…」

「そのわりにはよく噛んできたな。」

「ええ！？大丈夫なの？」



「ゆ、優生？」

「と、とにかく俺の背中は流さんでいい！」

「えええ。なんで？」

「なんでもまだ！さっ！早く早く！」

「むう…：わかった。」

パタン

「……………」

ちよっときつく言い過ぎたかな？

「まあ…色々と危なくなるから…いいか。」

髪を洗い終え風呂に10分ほどつかる。あ、体は髪を洗う前に洗ったからな。

「…そろそろでるか。」

ガラッ、

「雪…？でたぞ。」

シーン…

「…？雪ー？」

…反応がない。

「まさか…すねたか？」

とりあえず体を吹き寝巻きに着替え部屋に行く。

「…いねえ、つたどこにいったんだあいつ。」

管理人さんのところに言ってみるか、

ピンポーン

「管理人さーん？」

「ゆ、優生！？至急中に入れ！」

「えっ？あ、はい。」

カチャ…

「ふにゃあああ…！！！」

「…ぶっぶっぶっ…！」

「はあ、はあ。ようやく解放された…！」

「ててて…雪？」

「フー、フー！」

なんか興奮してるな。

…まさか！

「管理人さん！こいつなんか持ってきてませんか？」

「うん？なんかこれを…」

「それは…マタタビです。」

「えっ、っ、」

「じゃあー！」

「おっと、爪なんて振りかざすなよ。俺があんな事をいったのが嫌だったのか？」

「にゃあー！」

「…猫語は分からんが嫌だったんだな。すまなかったな、ちょっときつく言い過ぎた。」

「……………（ジー）」

「…なんだよ？」

「…お詫びに1つ言うこと聞いてくれる？」

「内容によるが…まあいいよ。」

「ふにゃ…やっぱり優しい。」

「…いいなあ。青春っていいなあ。」

「管理人さん、ちょっと黙りましょうか。」

「はい…それよりこの娘は？」

「あー…どうしようか？」

「ばらしてもいいんじゃない？」

「そんな簡単にばらしていいもんじゃねえだろ。」

「…マタタビに過剰反応して髪の色が白…まさか優生が飼っていた猫とか？」

「!？」

「あ…あれ？もしかして…当たっちゃった？」

「当たっちゃったよ〜」

「はあ…しょうがない。管理人さんの言うとおりですよ。」

「マジか…でもなんで？」

「「「あっ…」」」

「さあって…まあいいや。とりあえず住んでいるからには登録して  
もらっから。」

「はい。」

「…素直でいい子だね。」

「子供っほいだけですよ。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

「できたー！」

「ありがとう。あとは印鑑を…」

キュポッ

「OK。じゃねえっ。」

「ありがとうっじやいます。そんじゃ、帰るぞ。」

「ブッブッ…名字が…中井…名字が…中井…ブッブッ」



管理人さんがなんか言ってる気がするがスルーしよう。

「んじゃ！優生、一緒にお風呂に」

「俺はさつき入っただろ。」

「…なんでも言うこときくっていったよね？」

「うっ…でも駄目だ！他のやつで！」

「じゃあ…一緒に寝ていい？」

「……………はあ。風呂に入るよりはましか。」

正直苦渋の決断ですよ、はい。

「やった！それじゃ高速で風呂に入ってくるね！」

それだけいい風呂場に入った。

「…布団の用意でもしとくか。」

布団を出し終えた時に、

「でたよー！」

「早いな。既に着替え終えてるし、」

「はやく はやく」

「まてまて…よし。完了つと。」

「電気けして！」

「はいはい。」

パチッ

「うお！暗いな。」

ムニッ

「…ムニッ？」

「にゃ…」

「なんだこの柔らかいのは？」

ムニムニ…

「ふにゃあ…優生…そこは…」

「？」

「わ、私の…む、胸なんだけど…」

「………「う」めんー！」

「にゃ…もう、優生ったら、」

「わざとじゃないからな！」

「はいはい。んじゃ寝よう」

…柔らかかったな。

って、へんな事考えるな！され！俺の煩惱！

「はあ…おやすみ。」

「おやすみ」

最初の内は目が冴えてたがだんだん眠くなってきて寝た。

## 第2話 マタタビの力（後書き）

雪 ユキ

性別 女

身長 155センチ

体重 45グラム

髪型 白銀の長髪

性格 子供っぽい

誕生日：2月16日

好きな&得意な事 優生と一緒にいること。猫を被ること（？）

嫌いな&苦手な事 うるさい系は全体的に嫌い。

その他：優生が拾ってきた白猫。野良だった自分を拾ってくれた優生に好意を抱いている。子供っぽいのでよく小学生と間違われるが人間の年齢では14才で優生達と同じ年。

### 第3話 幼馴染みとの死闘

「くあ…動けん。」

俺の横には寢息を立てて眠っているお姫様……もとい雪。

「にゃ、優生…そこは…」

「…寝言か。」

とりあえず起こさないようにベッドからでて顔をあらいう着替える。

ピンポン

「優生…？いるんでしょ…？入るよ。」

「ああ…って」

さて、これは…

「きゃあ！……優生君？」

ああ…見つかったか。ちなみに夏生が俺の事を優生君と呼ぶときはかなりご立腹でぶちきれてる時の呼び方だ。

「いや、あの、これはですね、夏生さん。ふっか…い訳が…」

「問答無用！死ねえ！！」

「ぐああああ！…！」

1時間後…

「えー…つまりこの雪って娘はあんたが学校の帰りに拾った猫で拾った日の翌日に何故か人になってたと…」

「おっしゃるとおりでございます。」

「なんか優生が小さく見える…」

「言わないでくれ！雪さんえ…」

会話からわかるかもしれんが一通り夏生にフルボッコされた後に雪を拾ってからこれまでの経緯を話したわけだ。

「ふ〜ん…わかったわ。へんな事するんじゃないわよ。」

「しねえよんなこと…」

「優生になら…」  
「ニヨ」  
「ニヨ」

「なんかいったか？」

「ううん！な、何でもない！」

「さて…買い物にはいったの？」

「一応雪の衣服「行ってないわよね?」「はい…」

話してる途中で遮ってんじやねえよと突っ込みたかったが威圧的な言葉に縮こまってしまった。…情けないとか思わないでくれよ。

「私の服ならもう買ってるよ?」

「駄目よ!こいつが選んだ物は大抵ダサイのよ!」

「ちょっとまで、ダサイってなんだ!??」

「ダサイもんはダサイのよ!」

「意味不明な文字が書いてある服を選ぶお前よりかはました!」

夏生が着ているのは背中に『女心』と男には意味不明な言葉を書いている赤い生地服だ。他にも『キングキャット』や『サバイバル』等々…、作る方も作る方が買う方も買う方だ。

「なによ!」

「なんだよ!」

「……あの、2人とも。そろそろやめませんか?」

「「駄目だ(よ)!こいつとは決着をつけないといけないからな!」

」

「……………」

「あんだだって独眼竜とか呼ばれていい気になってんじゃないの？」

「あれは他の奴らが勝手に言ってるだけで俺が言いふらしたわけじゃない！いい気にもなってない！」

「そういつて、ほんとはいい気になってんじゃないの？」

「だからなってないって言って……………」

「……………ヒック……………」

「ゆ、雪？どうした？」

見ると雪は泣いていた。

「こんなの……………ヒック……………優生じゃないよ……………グスツ……………いつもの優生になつてよぉ……………」

「…………………………」

もはや喧嘩をしてる場合ではなくなった。雪をこれ以上泣かせるわけにはいかない。

「……………ゴメン。たかがセンスの事でマジになってた。」

「私も……………ゴメン。」



「グスツ…いつもの優生に戻った…？」

「ああ。すまなかった。」

「私も…」

「うん…じゃあいこ？」

「行くなって…どこに？」

「決まってるよ？買い物だよ。」

「買い物…まあいいか。」

「私も行くわ。」

「うん！じゃあ三人でいこっ！」

そう言った雪の顔には涙ではなく太陽のような笑顔があった。

### 商店街

「…で、なんで俺が荷物持ちなんかを…」

「優生は男でしょ？ならその力持ちをいかしなさい！」

「いや…それはなんか違う気がする…」

あれから30分間雪の服を改めて買い、1時間ほど商店街を歩き回り、今はゲーセンにいる。

「あ！2人とも、これしよ！」

「いいわね」

「え…男の俺がやるのか？」

雪がやるうと聞いたのはプリクラだ。恋人どうしならまだしもこいつらは幼馴染みと元猫だぞ。

「いいのいいの！ほらっ、」

「わかったから引つ張るな！」

「…はい。撮れた！」

「おー！すごい！」

「…なんか俺が物凄いアウエー感を感じるんだが、」

「気にしない気にしない！」

「気にするわ！」

「あ、もうこんな時間。そろそろ帰らなきゃ。」

「ああ。お前んち神社だっけ？」

「へー。巫女服とか着るの？」

「神社を掃除したり行事があるときはね。でもあの服きついのも…」

「成長してんのか？その貧ん」

バキィ！

「うっぷっ…！」

「誰が貧相な体ですって？」

「サーセン。以後気を付けます。」

「わかればよろしい。」

「うわぁ…！」

「雪、気にするな。こいつが体のことを気にして」

ドスッ！

「おおっ…！」

「もう少し強くしてもよかったかしら？」

「やめてください。ってか時間大丈夫なのか？」

「え？…あらほんと。それじゃ2人ともじゃね？」

「またね？」

「じゃな。」

「さて…帰って飯にするか？」

「うん。今日はちょっと疲れたけど楽しかった。」

「そうか。なによりだ。」

その後は買い置きしてた食材で色々つくり風呂に入り寝た。

寝る前にふと思った。

「あ…こいつの分の布団買っつのが忘れてた…」

「なんかいった？」

「別に。」

「そう？じゃ、おやすみなさーい。」

「おやすみ。」

### 第3話 幼馴染みとの死闘（後書き）

サクライナツキ  
桜井夏生

性別 女

身長 154センチ

体重 43キログラム

髪型 茶髪のショートカット

性格 キレたら性格が激変する。キレなかつたら少し天然？

誕生日：4月6日

年齢：13（もうすぐ14）

好きな&得意な事 神社でのんびりすごす。家事全般（料理以外）

嫌いな&苦手な事 神社を荒らす奴等。料理

その他：優生の幼馴染みで家が神社。家事はそこそこできるが料理だけはまったくできない、卵焼きが焦げすぎて何がなんなのか分からなくなるレベル。体のことを気にしており言われると問答無用で殴る。

## 第4話 学校での出来事

「まっつてよ。私もいくの」

「だめだ。お前は生徒じゃないし今は何故か人になつてるがいつ猫に戻るかわからんからできるだけ家に置いときたいんだ。」

「むっつ。」

「…はあ。帰ってきたら遊んでやるから我慢してくれ。」

「ん。わかった。」

「ありがとう。んじゃ、行ってくるわ。」

「はい。」

パタン

…朝から雪と一緒に学校に行くとか言ってるからできるだけなだめながら拒否した。

「あーら、朝から嬉しそうね?」

「あ、おはようございます。」

近所のおばさんが話しかけてきた

「別に嬉しい事があったわけでは…」

「隠したって無駄よ？私にはわかるんだから、」

「そういう事にしてください」

「はいはい。」

おばさんと別れ学校に行く

学校 二時間目

「…で、あるからして云々…」

たりい。朝から社会とかやめてほしいね、一応ノートはテスト後とかに提出するから書いてあるが頭には入ってこない。

キンコーンカーンコーン…

「む、チャイムが鳴ったか。では今日はここまで、」

終わった…寝よう

ザワザワ…ザワザワ…

「おい誰だよあれ？」

「しらねえけどめっちゃ可愛くないか？」

気にしないで寝よう…うん、それがいい

「白髪なんて珍しいな。」

白髪…きつとどっかの外国人がきたんだろう…

「だから、私は優生を探しに来たんだってば」

ザワザワ…ザワザワ…

「おい、今の聞いたか？」

「ああ。すっかりとな、優生っていったら2・Bにいる独眼の優生じゃないか？」

ないない…寝よう寝よう。気にしない気にしない

「多分なこの学校に優生って言ったらあいつぐらいしかいないし  
気にしない…気にしな

「優生さん。雪さんが呼んでますよ？」

「ちょー！弓ー！？」



「あ、いたー！」

「うげえ！？とりあえずこっちにこい！弓も一緒に！」

「え、ちよつと優生！？」

「待ってくださいよー！」

学校 校舎裏の駐車場

「はあ…はあ、ここなら大丈夫だろう。」

「つ…つかれた。」

「2人ともそれぐらいで疲れないでくださいよ。」

「お前はなんでそんなに平然と立ってられるんだ？」

「そりゃあ私陸上部ですし、」

「マジか。…んで本題に入るがその前に、」

「？」

「そこで隠れてる奴等は帰りな。」

「」「」「！？」」「」

「「え？」」

「2人とも気づいてなかったか。」

「「「……………」」」

「帰らないなら力ずくで帰らせるがいいか？」

「「「……………」チツ」」

ガササツ！

明らかに聞こえた舌打ちが気になるがきにしないでおう。

「うわぁ…ほんとにいたんだ。」

「無駄な第六感ってやつだよ。」

「すごい。」

「褒めるのはそんなくらいにして…説教タイムに入るがいいか？」

「ふえ？」

「家で大人しくしてろってあれほど言っただろ！なのになんで学校に来た？」

「う…それは」

「お前を心配してるからあまり俺の居ないところで長時間放置した

くなかったんだよ。でも学校を休むわけにはいかないから家に置いていたのに…帰ったら構ってやるとも言ったる？」

「う、うん…」

「だったら今すぐ家に帰れ。終わったら遊んでやるからな？」

「…わかった、ごめんなさい。」

「よし、じゃあまたな。」

「…うん。」

タッタッタ…

「…ふう。久しぶりに感情的になったな」

「ちよっと怖かった…」

「ん、そうか？」

「うん。なんか別人みたいだったし…」

「俺だって人間だ。怒るときは怒るし褒めるときは褒めるし嬉しい時は嬉しいような感情を表にだすからな」

「うーん…普段が無愛想なせいもあるからかな？」

「マジ？」

「マジです、なんか話したくても何か近寄りがたい感じがします。」

「うへえ…別にそういつ気はさらさらないんだがな」

「無意識の内にそうなってるんですよきっと。」

「ふーん…まあいいか。時間がヤバイしはやく戻ろつぜ。」

「はい！」

その後教室の野郎共（滝利除く）はもちろん、知らない上級生や下級生から「あの娘だね!？」みたいな質問を滝のように受けたのは言うまでもない

## 第4話 学校での出来事（後書き）

サエキユミ  
佐伯弓

サエキマヤ  
佐伯真矢

弓のプロフィール

性別 女

身長 150センチ

体重 45キログラム

髪型 黒髪のポニーテール

性格 嘘がまったくと言っていいほどつかない。誠実とでもいうのかな

誕生日：12月7日

年齢：12

好きな&得意な事 医学関連の本を読む。走る

嫌いな&苦手な事 医学的に悪い人。料理

その他：新しく桜咲中学校に入学してきた一年生。親の影響で将来は医者になりたいらしい。料理はまったくできず夏生とほぼ同レベル。部活では入学する前から桜咲中学校の陸上部の練習に参加している。

真矢のプロフィール

性別 女

身長 145センチ  
体重 43キログラム  
髪型 蒼みがかった黒髪

性格 ポーイッシュだが少しピュアな一面ももってたりw  
誕生日：12月8日  
年齢：12

好きな&得意な事 運動。走る事。料理

嫌いな&苦手な事 辛い食べ物。じっとする事。

その他：弓の妹でぼくっ娘。小6だが足の早さは中3顔負けの早さ。辛い食べ物は全面的に苦手でカレーはいつも甘口。料理は上手く弓よりは上手い。将来は陸上選手になりたいらしい。

## 第5話 急接近?!

放課後

「なあなあ。滝利教えるよ?」

「やだ。優生に口止めされてるし。」

「いいじゃん。ばれなきゃいいんだよ。」

「ばれなきゃ済むとも思ってるのか?厚志。」

「げっ……優生。」

「滝利、絶対に言うなよ。もしいったらお前がもってるE!」

「わーわー!!!今言うな!誰にも言わないから!」

「よろしい。じゃ滝利、帰ろうぜ……あの2人組にも言うなって  
いとけよ。」

「心配なく。既にいつてるぜ!」

「ちえ。じゃあな。」

「ああ。」

厚志と別れ家に帰る。今日は滝利と一緒に帰る。

「しっかしまさか学校で会うとは思わなかったな。」

「俺もだよ。あんなに言ったのに…」

「何を言ったんだ？」

「別に何もねえよ。」

「ふーん…まあいいや。じゃ、俺は仕込みがあるから先に行くからな、また明日な。」

「ああ、了解。」

そついい滝利は店の仕込みの為に帰った。

「さて…何か買って帰るか。」

恐らく今日は雪が離してくれそうにないから先に晩御飯の用意をしておく。

買い物も終わり家に帰る。

「ただいま」

「おかえり！」

ガバツ！



「おつとつと…卵は無事か。」

「私より卵の心配!？」

「さて、かなり早い飯にすぞ。」

ちなみに今は午後5時45分だ。

「無視!？」

「早く俺と遊びたいんだろ?だったら先に飯とか風呂とか済ませておいてあとでゆっくり遊ぼうぜ。」

「…うん!私も手伝う!」

「料理…出来るのか?」

「わかんない。」

ズコーッ!つと、ひと昔前ならこついつりアクションをするだろう。

「はあ…とりあえず教えるからついてこい。」

「やったー!」

「まずは目玉焼きから……」

「おいしそ〜。いただきます!」

「どれ…」

パクツ、モグモグ…

「おいし〜」

「旨いな…以外とセンスあるかも、夏生とは大違いだ。」

「これも優生のおかげかな。」

「この料理はお前が作ったんだ。俺はアドバイスしかしてないしこれはお前の腕だよ。」

「そう?…へへっ、誉められた」

満面の笑顔をこっちに向けてきた。…一瞬ドキツときたのはこのだけの話。

「はあ〜美味しかった。」

「ごちそうさん。じゃ、俺は片付けるから先に風呂に入ってきてくれ。」

「はい。」

カチャカチャ…

ガチャ！

「出たよ」

「了解。」

食器の片付けを終え雪が着替えたのを見計らい風呂に入る。

「ふう…そろそろ出るか。」

描写が少ない理由は察してくれ

「あれ？眼帯がない。」

どこに置いたっけ…？まあ無くても困ることはないがあつた方が落ち着く。

「あ、でた？」

「…何故お前がそれを持っている？」

それすなわち眼帯。

「たまには眼帯外してよ。私だって優生が眼帯してない姿見たいし」

「今日だけだぞ？正直オツドアイはそんなに好きじゃないんだし」

「やた！じゃあ早くきてー！」

「はいはい。んで…何がしたいんだ？」

「えーと…その…」

「なんだ？言いたいことならはっきり言えって。」

「…頭を撫でてほしいんだけど…いいかな？」

「んなことかよ。ほね、」

なでなで…

「ふわぁ…にゃうう…」

猫耳が少し垂れ下がり少し体温も上がったような気がする。

「こんなんでいいのか？」

「じゃ、じゃあ…あと一つ。」

「なんだ？」

「その…横に居てもいい？」

「？、今そつじゃん。」

「そうじゃなくて…密着するみたいなの…」

「…密着？」

「う、うん／＼」

「えと…どうか？」

「トッ…」

「じゃ…うん。」

「どうでいいの？」

今の形は簡単に言えば体を密着させてる見たいな感じ。

あ、抱き合っているとかがじゃなくて座って隣同士にいる感じだ。

「なんか…安心する。」

「なんで？」

「父親…見たいなかんじかも…」

「ふうん…俺ってそんなに老けてるのね。」

「え！？ぜ、全然！」

「何故慌てる…冗談だぞ？」

「そ、そう？ならよかった…」

なにが良かったかは知らないがそういいまた隣に座る雪。

時刻は午後9時を回っている。

「…ねえ優生？」

「ん？」

「優生は私のこと…どう思ってる？」

「大切な家族だけど？」

「いや、そうじゃなくて…女性として…どう思ってる？」

「女性として？…うーん。」

また難しいのを…

にしても…なんで急にこんなことを？

「なんでまた急に？」

「え！？いや、その…」

「……………」

「……………」

沈黙…これはフラグか？

「あー…言いたくないのならいいわ。まあ俺はお前を女性としては  
みてるつもりだ。」

「え…？」

「けど今はさっきもいったが家族みたいな感じだ。今の気持ちは  
それ以上もそれ以下もない。」

「じゃあ…それ以上の関係にもなれるかもって事？」

「さあな。未来の事なんてわかりやしないさ、でもそれ以上になる  
なら以下になる可能性もあるってことだからな。」

「うん…」

「……………もう寝ようぜ、明日もあるしな。」

「…わかった、おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

……………今さらだがそれ以上とそれ以下ってなんだ！？

## 第5話 急接近?! (後書き)

カワスマタキリ  
川澄滝利 ヤマモトアツシ  
山本厚志

### 滝利のプロフィール

性別 男

身長 154センチ

体重 43キログラム

髪型 黒髪の少しくせつ毛

性格 人見知りという言葉をしらないかの如く誰にでも声をかける(ヤヴァイ人除く)

誕生日:7月5日

年齢:13歳

好きな&得意な事 食べ歩き。魚をさばく事

嫌いな&苦手な事 人参とピーマンが嫌い。ヤヴァイ人やお偉いさんとの会話(滅多にないが)

その他:作中ではあまり描写されていないがナンパ癖がありしょっちゅう美人に声をかけては失敗している。魚をさばくのが大好きでさばいてるときは集中し無言になる。

### 厚志のプロフィール

性別 男



身長 168センチ

体重 60キログラム

髪型 ボウズ

性格 約束事などはほぼ必ず守る。

誕生日：9月29日

年齢：13歳

好きな&得意な事 ゲーム、エグ○イルの曲を聞く。エグ○イル  
のあ○しの外見モノマネw

嫌いな&苦手な事 自己中心的なやつ。幼稚園児など、幼い子の  
お世話

その他：その高い身長をバレーボールに生かせ！と滝利に言われ  
優生共々バレー部に入部した。本人は野球がしたかったようだがや  
ってみるとバレーも面白かったのでバレー部にいる。エグ○イルが  
大好きであ○しのモノマネもよくしている。

## 第5話 転校…生？

「みなさん、おはようございますー！」

「やけにハイテンションすね。」

「川澄君には言われたくないわね…まああんな娘がきたらテンションでも上がるかな」

「娘？誰か来るんですか？」

「ふふふ…よろこべ、男子達！なんと転校生が来たわよ！しかもかなりの美少女！…！」

「……………おおお！…！」

先生の発言を聞き野郎共は激しく喜び女子はそれを白い目で見ている。

かくいう俺も多少は気になってるのが正直な気持ちだ。

「やつべー、テンション上がったわ！」

「俺もだ！なあ優生？」

「ん？ああ、そうだな。」

嘘は言っていないはず

「さて…入ってきて。」

ガララ

さあ押んでやろうじゃないです…か…

「優生！やっぱりいたー！」

「あら、優生君知り合い？」

「知り合いというか…まあそんなところです。」

男子女子共々から白い目で見られてるこの現状。なんか微かな殺気  
さえ感じるんだが……

「はじめまして！私雪って言います！仲良くしてね〜」

ザワザワ…ザワザワ…

「なあ、あの娘って…」

「間違いない。昨日来てたあの娘だ。」

「まさか転校生とはなあ。」

各々の意見を言ってるなか俺はあいつが来た理由を考えていた

「（なんであいつが…？確か家を出るときにはちゃんと家で待ってるっていったよな…）」

「いや〜。まさか理事長がこんなに可愛い娘をつれてくるとはね〜」

「（理事長…まさかあの爺か！？）」

「席はそうね〜…知り合いが近くの方がいいから優生君の隣ね。」

「やた」

「先生、異議があります。なんで隣なんですか？」

「だって上下と斜めは席が空いてないし、隣に誰もいないじゃん。」

「優生〜！」

飛び付いてきたので軽く受けとめ素早く席に座らせる。

「「「おおー」「」」

なんだそのおおーって、

「紹介も終わった事だし、さっそく授業を始めるわよ！」

「はあ…憂鬱。」

結局俺は男子達の殺気を含めた視線を受けながら昼休みまで過ごし

ていた

昼休み 理事長室

「じじいいいい！！！」

Bannon!

俺はドアが壊れる勢いで理事長室のドアをあけた

「ぬお！？……なんじゃ優生か」

「そつだ俺だ、ちと話がある。」

「話？なんじゃ？」

「なんであいつが学校に来てるかってことだ！ついでになんてあいつの事をしている！？」

「ふおつふおつふお、なんじゃそんなことか。」

「理由によつては……」

「あー、はいはい。あいつつてのは雪ちゃんの事じゃろ？お前が住んでるアパートの管理人から聞いたんじゃよ。」

「管理人…か。それは分かったがなんで学校に連れてくる必要があった？」

「聞けばお前が学校に行つてるせいで雪ちゃんが寂しい思いをして

るって話ではないか。そこで雪ちゃんを学校に入学させれば友達と一緒にいれて寂しくないと思ったんじゃないか。」

「…ふーん。」

「納得してくれたかの？」

「まあ一応…あ、ついでに家に新しいベッドか布団用意しておいてくれ。」

「なぜじゃ？」

「雪の寝る場所を確保するためだ。」

「ふむふむ。了解じゃ」

「ああ、用件はそれだけだ。じゃあな」

「まっ、まて優生！」

「何だよ？」

「あの娘とはなにか進展したのか？」

「…何いつてんだ変態エロじじい。なんもねえよ」「ひどい……しかし年頃の男女が同棲してるのに何も無いじゃと…：がっかりじゃ」

「…しばくぞ、変態ドMエロじじい。」

「わしゃドMではない…！」

「はいはい。じゃ、手配よろしく」

「あいあい」

さて…どうしようか…とりあえず教室に戻るか

教室

「優生！あの娘と一緒に住んでるってマジか!？」

「は？」

教室に入ってそうそう見知らぬ男子に呼び捨てにされた挙句タメだと？スリッパのいろをみるかぎり1年だろこいつ。

「…質問の返答の前にとりあえず先輩にタメと呼び捨てはいい度胸じゃないか？」

こんなところで先輩ぶる俺情けね

「え？あ、す、すみません！」

「はあ…別に謝らなくていいが…まあいいか。んで俺と誰と一緒に住んでるって？」

「あの娘っすよあの娘!」

見知らぬ男子Aが指差した先には男子女子から質問攻めをつけている雪の姿。

「ああ〜あいつ?」

「あいつつす。さっき女子から聞いたんすけど先輩があの子と一緒に住んでるってきいたんす!これってマジすか?」

「つすつするせえな…しかしこの噂は事実だが否定したほうがよさそうだな…いずればれるだろうが」

「嘘にきM」

「あ、優生!また帰ったら料理教えてね!」

「「「「「「……………」」」」」」

そのばにいた全員が凍りついた。

「優生先輩……」

「優生……」

「優生さん……」

「あ、あはは……」



あーあ、死んだなこりゃ。

第6話 パーティをするようです『前編』(前書き)

今回やたら会話が多いですw

## 第6話 パーティをするようです『前編』

さて、少し遡ってみようか。

まず朝に雪が学校に来たんだよな、しかも同じクラスで隣の席だ。

そして昼休みに爺……………もとい理事長に雪が学校に来た理由をきいてあいつよつのベッドを頼んどいたんだよな。

そして暇になったから教室に戻ったら後輩に呼び捨てで呼ばれ……………って関係ないなこれは。

んで、雪と俺が同棲してるという噂が広まったらしくくて否定しようとしたら雪と一緒に住んでる事をばらしたんだっけか。

「……………ちよつと優生きいてるの!？」

「てめええ！なに先にやってんだバカ野郎！」

「まったく…先輩には失望です。」

目の前には若干キレぎみの夏生によくわからない発言をした滝利と呆れている弓の姿が

「まで、まず整理しよう。俺が雪と一緒に住んでるのは事実だ。でもそれは仕方なく住んでるだけであってだな……………」

「でもこの前私の胸触ったよね？」

「おまつ！あれは事故だろ！」

「えー、あれはわざとらしかったよー。」

「」「」

弁解虚しく女子から白い目でみられ男子から羨望混じりの殺気が…

「はあ…何いっても無駄かこれは。」

「なんだなんだこの騒ぎは？」

「あ、先生。優生が転入生の雪さんと一緒に住んでるらしいんです。」

「

「ほ…で、なんか進展はあったのか？」

「胸をさわったようです。」

「あれは事故だバカ野郎。」

「それだけ？」

「それだけですよ。」

「つまんないの。」

つまんなくて結構です！

「まあいいわ、授業始めるわよ！ほらこのクラス以外の人は帰った帰った！」

あの小さい体で言われても説得力ないよな…

「ふう、じゃ始めるわよ。教科書の10ページを開いて…」

とにかくバレてしまったのは仕方ないな。これからどうなることやら。

放課後

「優生！一緒に帰るわよ！」

「別にいいが…なんでそんな怒り口調なんだ？」

「なんでもいいの！ほら、雪ちゃんも」

「私も？」

「うん。むしろ雪ちゃんに聞きたいことがあるし」

「なら2人で帰れよ…」

「「「だめ！」「」」

「ガクッ…」

桜が少し散りはじめている

やっぱり桜は散るのが早いと思う。だからこそ儂くて美しいんだろ  
うけど、

「…なんて事を考えていた俺がバカだったよ。」

「なんかいった？」

「別に。」

今はとりあえず夏生の家に向かっている。さっき散るのが早いとか  
思ってたが日時はプロローグの時から調度1週間たったぐらいか。

「やつ。」

「あ、いいinchよ。」

「久しぶりな気がするわね、」

「作者の中では出オチキャラになりかけてたんだよ？」

「…嫌な予感しかしない」

「気のせいよ気のせい。奇遇だし途中まで一緒に帰らない?」

「いいけど…一回私の家に行くから帰るのは遅くなるかもよ?」

「別に構わないわよ。親に連絡すればいいし、」

「ん〜、わかった2人ともいいわよね?」

「いいよ〜」

「同じく」

回りから見ればハーレムなんだろうがこっちはハーレムなんて幸せな感じじゃねえ

「…さて、ついたわよ。」

「おおー、これが神社か。」

「雪さんは夏生の家に来るのは初めて?」

「うん。あと呼び捨てでいいよ。」

「わかったわ。それじゃ、おじゃまします」

「あらみんな、いらっしやい。」

「久しぶりです春菜さん。」

「うふふ…まあまあ新しい娘をつれてきちゃって、」

「新しい娘？…雪のことですか？」

「雪ちゃんっていうのね。まあ立ち話もなんだしささっ、上がって上がって」

相変わらずだな夏生のお母さん。フルネームは桜井春菜、おっとりした性格でたまにチクリとくるさっぷりが恐ろしい。

「お、優生じゃないか。」

「お久しぶりですね、繚輝さん。」

桜井繚輝…一応ど偉い会社の部長なのだがこれがまた軽いのなんの、よく出世できたなとしみじみ思う。

「ガツハツハ！最近は忙しかったからのう。…しかしいつのまにハレムなんて作ってるんだ？」

「ハレムなんてもんじゃないっすよ。」

「またまた」

「お父さん？そろそろ連れてっていいかしら？」

「は、はい…」



そして春菜さんのSは夏生が受け継いだようだ。

「…なんか前に来た時と配置がまったく変わってない気がするんだが？」

「気のせいよ。」

相変わらず質素な部屋だな。女の子らしいものがあまり見当たらない、俺には神社の子〃和風なんてイメージが前まであったのだが夏生の部屋をみてその考えが180、いや360。は変わったな。それくらい和風じゃなくてよくいえばシンプル、悪く言えば地味な部屋だ

「さて…本題に入るわよ。」

「お、おう」

いつになく真面目な顔になったな

「雪ちゃんって…どこの子？」

「それ、私も気になる。」

「あー…」

「どうしようかな…そうだな！」

「俺の親が連れてきたんだ！」

「どこから？」

「仕事仲間からしばらく預かってほしいって言われてな。」

「ふーん…じゃあなんで室内でも帽子を被ってるのかしら？」

「ああ…それはだな…」

「猫耳を隠すためー！」

「は？」

「おま！今言う事か！？」

「猫耳って…マジ？」

「マジだよ。ついでに言えば私賣女と会ったことあるよ。」

「嘘だー！」

「嘘じゃないよ。ほら、優生と一緒に帰ってた時に…」

「…ああ！あの時の！」

「思い出した？ほんとあの時はごめんね？」

「別に構わないわよ。…しかしどうやって人に？」

「さあ？」

「ええ！？」

「気づいたらこうなってたもん。」

「どんだけ…」

「ってか…この娘が元猫って事はさっきの親が云々ってのは嘘だったわけね、」

「そのとおり…なんかごめん。」

「謝る事じゃないわよ。でもって夏生はこの事をしてた訳？」

「うん、優生のお父さんが私のお父さんに言ったみたいだね。それを聞いたんだ。」

「へ〜」

「…ちょっとまで、俺の親父がお前の父さんにいった？」

「うん。お父さんが言うには」

「…」

「優生のお父さんは雪ちゃんとするでるといふ事実を知ってるわけね」

「なぜだ…どつから情報が漏れた？」

「管理人じゃない？」

「あいつかー、帰ったらしばるか。」

「手加減しなさいよ。」

「状況によるな」

「だめだこりゃ。」

「そんなことよりお腹空いた」

「はいはい、ちょっとまってね」

ドタドタドタ…

「お前は自重という言葉をしらんのか」

「んなことしたら人生損だよ？」

「なわけあるか、」

「雪ちゃんってまさか大食い？」

「結構食つぞこいつ。食べ方は汚いかな」

「どんな食べ物も食べてしまえば全て同じー」

「…だそうだ。」

「うわぁ…」

『優生ー、ちょっときてー』

「へいへい。」

ドタドタドタ…

「何しにいったんだろ？」

「そぉ…」

ドタドタドタ

「雪、一旦家に帰るぞ。」

「一旦？」

「なんでも久しぶりに俺と繚輝さんが揃ったからパーティーをしたいらしい。だから帰るのは夜中の11時は過ぎるな。」

「ふえ〜、そうなんだ。」

「ああ、じゃ、一旦帰るわ。委員長はどっするっ。」

「んー…どっすどっすかっ。」

「俺に聞くなよ…親に聞いてみたら？」

「わかった。また連絡するわ」

「ああ。じゃな」

「またね」

自宅

「…ありがとうございます。」

「いえいえ、それでは。」

ボタン、ブロロロ…

ついさっき頼んでいた雪よつの寝床を用意してもらった。まさかベツドだったとは…

雪には先に行くよう伝えてある、時間はいま6時ぐらいか。

「飛ばせば間に合うかな？」

愛用のチャリ（自転車）に又借り夏生の家に行く。

「しかし…夏生が料理を作るのかな…」

これから戦場に行くような気持ちで夏生の家に向かう

第6話 パーティをするようです『前編』（後書き）

ヤマダシユウナ  
山田秋奈

性別 女

身長 147センチ

体重 39キログラム

髪型 茶髪でショートカットでヘアピンをしている

性格 リーダーシップがありまとめるのが得意

誕生日：10月10日

年齢：13歳

好きな&得意な事 BL系の本を読んだり読書したり、ゲーム、

嫌いな&苦手な事 うるさい場所（カラオケ除く）、運動

その他：通称『いいんちよ』、優生は普通に委員長とよんでる。その通りクラスの委員長でまとめるのが得意。常にいいんちよと呼ばれてる為本名を知る人物は少ない。ゲームオタなのでたまにフラグ等を言ったりする。軽い腐女子



第7話 パーティをするようです『後編』

「さあどんどん食べ！」

「わーい！いっただっきま〜す！」

「少しは自重しろよ。」

「優生君も遠慮はらんから食べよ！」

「はあ……」

ただ今20時、夏生宅にて食事中。委員長は親から許可がありたくしく一緒にいる。そしてどうやら食事は夏生と春菜さんが作ってくれたようだ。

「さて……食べますか。」

「どいぞどいぞ、」

まずはこの若干焦げている卵焼きを  
パクッ

「もぐもぐ……この卵焼き春菜さんがつくったんですか？」

「あらら〜違うわよ。作ったのは夏生よ？」

「そーよ！私だって少しは上手くなってるんだから！」

「ふーん……」

なぜこんなに旨い……ありえん。

「春菜さんに手伝ってもらったのか？」

「違うわよ！私一人で作ったのよ！」

「!?!」

思わずこけてしまいそうだった

「あと夏生一人で作ったのはその唐揚げと天ぷらもそうね。天ぷらはちよつと手伝ったけど」

「そうよ!」

「どや顔されても……」

「美味し〜。ね、秋奈？」

「うん、いったい何があったんだろ？」

「……みんな私の事をどんな人と思ってるの？」

「超料理が下手な女子」

「ガクッ……」

ただまあ夏生の料理が旨いのは事実だ。特訓でもしたのか？

「繚輝さん、夏生が最近料理の特訓とかしてました？」

「いや、全然知らないなあ。本当何があったんだろうか？」

「そうですね。」

「おかわり！」

「あらあら……雪ちゃんったらよく食べるわねえ。」

「まだ3杯目だよー」

「食べすぎだろ。」

「だって美味しいんだもん！」

「おう、じゃんじゃん食べよ！よく食べてよく遊べ！」

「学べはどっこい……」

「知らないなあ〜」

「マジスカ……ってかよくあるお父さんが言う台詞ですね。」

「なんてこった。」

「あはは……」

1時間後

「お腹いっぱいだよ」

「げふ……もう食べねッス。」

「ごちそうさまでした。」

「ふう食った食った。じゃ、片付けはしとくから少し休憩してお風呂に入っておいで。」

「え……いいんですか？」

「何いつてるんだ、俺と優生の仲じゃないか！」

「じゃあお言葉に甘えますか。」

「とりあえず私たちが先にはいるわね。」

「おっ。」

風呂場（途中まで夏生視点）

「おお〜。」

「3人一緒に入るのは無理だから交代ごうたいではいるわよ。」

「わかってるって」

あれから30分程たち今はお風呂に雪ちゃんといいんちよといる。

「まずは体を洗いますか。」

「うんー！」

ゴシゴシ……

「しかし雪ちゃんって綺麗な髪してるわよね？」

「確かに、しかも銀髪だし。」

「人間になる前は毛並みが白かったしね、その名残かな？」

「ふーん……」

さわっ

「にゃん!？」

さわさわさわ……

「ふにゃあ……耳と尻尾さわるの……やめてえ……」

「すごい触り心地いいんだけど……」

「ふにゃ……もう……だめ……」

ボタン

「え、ちよっと？雪？」

「……ふにゃあん……」

「……気絶したみたい。」

「耳と尻尾は敏感なのね。とりあえず優生に知らせないと。」

「そだね、優生〜！」

『なんだ〜？』

「雪ちゃんが気を失っちゃった。」

『はあ！？』

「まあ耳と尻尾を触ってたら気絶したんだけどね……」

『マジかよ……で、どっしると？』

「とりあえず雪ちゃん連れて帰って寝かせなさい。」

『わかったが・・・どうやって着替えさせたりさせる?』

「お母さんにやってもらえば?」

『その手があったか』

「話は聞きましたよ。優生君はちょっと向こうにいらしてください。」

「うお!・・・びっくりしたあ。」

「そうかしら?まあ早く向こうにいらしてください。」

「はい。」

「どうした?」

「雪が気を失ったみたいです。」

「ええ!?」

「まあ頭を打ったとかじゃないみたいですから大丈夫でしょう。」

「なんだ……とりあえず大事にいたらなくてよかったな。」

「そうですね。」

「優生君終わりましたよ。早く家で寝かせてあげなさい。」

「わかりました。それじゃ、」

「おう、じゃな」

「……ふにゃあ」

「何て声だしてんだ……」

今は2人乗りで帰宅中だ。月夜に舞う桜の花びらが美しいな……

「しばらくここで居たいが……こいつもいるしまたあとかな。」

自宅

「ただいまー」

現在時刻は22時。とりあえず雪を新しいベッドに寝かせて俺は風呂に入るか。

シャー

「くあ……眠いな。はやく出よう。」



ガチャ

着替えると雪は寝息をたてて寝ていた。……ちょっと触ってみようかな

さわ……

「ふにゃ……にゃふん……」

改めて触るとめっちゃ触り心地いいな。次は尻尾を……

「むにゃ……優生？」

「っ！？な、なんだ？」

焦った、急に起きんなよ……

「あれ？私なんでここに？」

「入浴中に気を失ったらしくくてな、夏生の母さんに頼んで着替えさせて帰らせてもらったんだ。」

「ふーん……じゃあ優生はさっき何をしてたの？」

「え！いやあ……別に？」

「ふーん……まいつか、それより、今日は一緒に寝よ〜」

「何故に？」

「だってせつかくベッドがきたんだもん。だから一緒に、ね？」

「いやいやいや、2人も入れるくらい……でかいな。」

今気づいたが寢室ギリのところまでベッドがある。流石に狭いな……

「しょうがない、今回だけだからな。」

「やったー！じゃ、おやしむ〜」

「ああ、おやすみ。」

明日はちよつと管理人さんに相談しようかな

第7話 パーティをするようです『後編』(後書き)

さて、夏生の料理がどうなるのかねw

## 第8話 部活やじろじゃないよじれ

「うぐああああー!!」

「お腹痛い……なんで」

ただいま絶賛腹痛が襲ってきてる。多分昨日の夏生の料理のせいだ

……

「雪い……学校行けるか？」

「無理かも……痛いよ」

「参ったなこれは……」

実際俺もかなり痛い。冷や汗だらだらだぞこれ、雪は顔から血の気が引いていつてる気がする。

「これは大丈夫じゃなさそうだな……今日は仕方ない、休むか？」

「うん……ベッドに居るね。」

「おー……」

さて、学校に連絡……を……？

グギョルルル……

「うおおー!?!」

まずい……漏れる。トイレに行かねば……

「優生……トイレ行かせて……でそう。」

「!?!。……わかった、俺は管理人さんのトイレを借りる、それじゃ」

「あ、ちよつと、優生!?!」

俺は光のごとく家をでて管理人の部屋に向かいこう言った。

「トイレ貸してください!」

……当然管理人さんは啞然としてた訳だがそんなことは気にしない。こちらら（精神的な意味で）危険が迫ってるんだ、速攻でトイレに入った。

「ゆ、優生!?!。どうした!?!」

「昨日俺の幼馴染みの料理を食ったら……」

「うん、腹痛だね。薬いるかい?」

「いただきます……」

ジャー…………バタン。

「ふう、危なかった…………」

「あはは、はいこれ。」

「どうも。」

この薬…………間違いなく正〇丸だよ…………まあいいや

「ありがとうございます。それじゃ。」

「はいはい。」

雪がどうなってるかが心配だな…………

「雪ー？」

「優生！大丈夫だったの？」

「なんとかな、お前は？」

「私もなんとか…………でも前よりはましになったから学校はいけるよ。」

「そうか。じゃ、行くか？」

「うん！」

ただいまの時刻午前7時40分。とばせば間に合うか？

### 桜咲中学校

「お、今日は遅いな。」

「夏生の料理を食ったら腹痛だとよ……マシにはなったがまだ痛い。」

「なるほど、だからいいんちょもダウンしてるのか。」

やっぱりいいんちょもか。……今さらだが春菜さんと繚輝さんは夏生の料理に耐性でもあるのだろうか？

「皆さんおはようございます。今日は何があるか知ってますよね？」

「はい！確か渚先生が失恋した日ですよね？」

「……滝利君は後で補修ね。では厚志君、いってみて？」

「部活の勧誘か何かだった気がする……」

「そのとおり！一年生を1人でも多く勝ち取るための部活紹介という名の バトル があるのよ！」

ぶっちゃけだるい。でもま、勧誘はするが。

「そして恒例となった男子バレー部にマネージャー希望の女子が詰め寄る光景も見られるのよ！」

恒例になってんのかよ……既にマネージャーはいるというのに

「ふふーん、放課後が楽しみね」

やだなあ……もう疲れたよ……寝てよう、今日は体育は無いし授業の内容はあとで夏生にでも聞くか。

### 放課後

「その君！野球部に入って汗と涙の青春をしようじゃないか！」

「バスケ超楽しいぜ！見学だけでもいいからきてね！」

「走ると気持ちスカッとできるよ！足も速くなるしね、陸上部は誰でも募集中！」



各々が部活紹介をしている。つか野球部の宣伝は高校生が言う台詞じゃないのか

そして我らがバレー部といえは……

「みんなー！バレーb「きゃー！かつこいいー！……」

予想通り女子達が騒いで男子はもとより部の紹介すらできないわけだ。

「えつと……とりあえず静かにしてくれませんか？部の紹介が出来ないんだけど……」

「……はい。」

何故か俺が言えば一発で黙るな。ほかのやつらなら見向きもしないのに……

「それじゃ、紹介します……」

「ふむ。新入生で見学にくる男子は6人が、珍しく多いな。」

この人は木崎哲二。バレー部の顧問で腕前も中々、おまけにイケメ

ンと凄い御方だが独身、密かに渚先生を狙ってるとか狙ってないとか

「いつもは女子が多いんですがね、見せ場がよかったんでしよう。」

見せ場と言うのは体育館のステージの上でちょっとしたプレーをすることだ。場合によってはステージから降りる場合もあるが。

「それでも女子は20人もいたからな。まっ全部女子のほうに回したが。」

いつもどおりだな。

「それよりお前大丈夫か？なんか顔色悪いぞ、」

「ああ……気にしないでください。ちょっと過度の腹痛が襲ってきただけですから。」

「そうか、明日から部活だから無理はすんなよ。」

「はい。それでは、」

「おう、またな。」

うー、腹いてえ……。どうしたもんか。……帰ってゆっくりしようか。うん

「ただいまって……雪？」

「むにゃ……何？」

「何？じゃねえ。何してんだお前は、」

ベッドに体をこすり付けてる……マーキングだと信じたい。

「ただのマーキングだよ。」

「そうか、何かへんな趣味にでも目覚めたのかと思ったわ。」

「ふにゃ！私を変態扱いしないでよ！」

「わりいわりい。ちと管理人さんと話してくるからここにいろよ。」

「はい。」

「管理人さん？」

「何？」

「ちょっと相談が、」

「相談？どんな？」

「部屋の改築とか……無理ですかね？」

「なぜそんな急に？」

「いや、前に雪用のベッドを発注して設置したんですけど思ったよりでかくて部屋が狭いんですよ。」

「それで、改築して広くしてもらおうと。」

「はい、そうです。」

「うーかどうやって部屋に入れたんだろうかあのベッド？」

「うーん……改築はさすがに無理だね。他に借りてる人もいるし。」

「そうですか……すみませんわざわざ。」

「いやいや、こちらこそ力になれなくてすまないね。」

「話はそれだけです。それでは、」

「またね、」

「雪ー？腹の具合はどうだ？」

「んー？まあ大丈夫だけど……」

「飯どうする？」

「何でも」

そういうのが一番困るんだが……

「じゃ、お粥でいいか？念のために」

「いいよ」

「了解。」

「お粥ってなんかあれだね……水を吸いすぎた米だね。」

「まあ事実そうだし。」

晩飯のお粥を食べ終わり食後のまったりタイム。もちろん歯磨きと入浴は済ませた。

「さて、どうしようか……。」

「何を？」

「俺の寝場所だよ。最悪床だが……」

「別にこのベッドで寝ればいいんじゃない？」

「そうゆうわけにもいかんだろ。色々」と

「それもそっか……」

「明日爺にいつてみるか、あいつならなんとかなるだろう。」

「爺って理事長のこと？」

「ああ、変態エロじじいだよ。」

「扱いがひどいね……可哀想」

「あいつの本性を見てないから言えるなその言葉。」

「あはは……で、今日も一緒に……寝よ？」

「断る。俺は床で寝る。」

「床に寝たら朝体が痛くなるよ？」

「布団敷けばギリギリなんとかなるだろ。それに2人で寝たら狭い  
だろ？」

「その分体が密着して暖かくなるもんね」

「……俺にはわからん。」

「そう？だったら分かせて……」

「あー、はいはい。もう寝ましょーおやすみー」

「むじ……しまんないの、おやすみー。」

ちん、のびのびとしゃべりながら。

第8話 部活や二つろじゃないよこれ（後書き）

小川 渚 オガワナギサ

性別 女

身長 143センチ

体重 35キログラム

髪型 黒髪でツインテール

性格 若干子供っぽい？

誕生日：3月4日

年齢：恋に飢える25歳

好きな&得意な事 勉強、カラオケ

嫌いな&苦手な事 ヘビメタ系の音楽、運動

その他：ざっくり言えば合法ロリ。校内だけでなく町全体にも知られてるちょっとした有名人。しかし本人は大人の魅力溢れる女性になりたいらしいが叶わぬねが i (殴ry。優生達のクラスの担任。



## 第9話 入部希望者

「はい、はいそうです。すみせんがお願いします。」

結局、あのベッドは引き取ってもらうことにした。雪がブーブー言っていたが無視して業者さんに連絡をした。明日の昼頃には片付くようだ

「じゃあ今日はどこで寝るの？」

それだ。雪が言うようにあのバカでかいベッドが無くなったので雪がくるまえにあった布団しかないのだ。管理人のところであれば問題ないが…もしなかったら困るのでそれを考えてるのだ。

「そつだなあ……やっぱりソファとか？」

「駄目だよ。そんなの私が許さないからね？」

「へいへい……」

こうなったら管理人に託すしかなさそうだな…あ、そうだ。

「雪、今日は俺以外の誰かと帰ってくれないか？」

「なんで？」

「今日部活なんだ。だから俺は遅くなるぞ、」

「やだ、私もいるー。」

「お前なあ……やることないぞ？しかも部活見学の新入生もいるし……ぶっちゃけ退屈だぞ。」

「それでもいいの。」

「はあ、まあいいか。すぐ見えるところにいるよ。」

「はい」

体育館

見学にきたのは6人だ。とりあえず新入生大会には出られそうだな。

「アップ終わったか？終わったら今日のメニューを言うから集まってくれ」

アップは終わったので哲二先生の元に集合する。今日はどんな事をするのだろうか

「とりあえずスリーメンをやったそのあとにスパイク練習をするぞ、んでサーブ練習をしたあとに全体練習をする」

スリーメンとは3人で1コートの半分に入り強打のレシーブやフェイントカバーをするのだ。かなりキツイが体力や技術も上がるのでちょうどいいの。後は言わなくてもわかるだろう。

「……今日の練習はこれで終わりにする。各自整理体操しとけよー」  
練習を終え整理体操をする。雪の姿が見えないが先に帰ったか何か  
だろう。

「優生ー、ちょっと保健室にいつてこい。」

「？、わかりました。」

なんだろうか？俺特に怪我とかしてないんだが、とにかく保健室に  
向かう

保健室

「失礼しまーす」

「あら、きたわね。ちよつとこつちにおいで」

そついいベッドに誘導される。何かされる系か…？

なんて意味不明な幻想もなくカーテンを開けると猫耳を立ててすや  
すや寝ている雪が…おまえ猫耳…

「まさか猫だったなんてね。」

「秘密にしてくださいよ？公にはしたくないですし。」

「わかってるわよ。もう夜も遅いし早く帰りなさい。」

「へーい。ほら雪、おきる。」

「むじや…」

「こりゃ起きそうにないわね。優生君確か歩きだったわよね、おんぶしてあげたら？」

「ええっ、マジですか…」

「嫌なの？」

「別に嫌ではないっすけど…」

「じゃあいいじゃない。ほらほら、早く早く！」

「うわっ！ちよー！…」

問答無用でおんぶさせられた。雪自体は大丈夫だが荷物が重い…

「じゃあね〜」

そついい先生はどこかに行ってしまった。なんなんだいったい…

とりあえず雪をおぶって校門までたどり着いた。靴はいてるときに思ったがこいつおきてんじやないのか？寝たふりか？

とにかく家に着いた。鍵を開けて雪をソファに寝かせて佐藤さんのところに行く、布団があればいいのだが…ちなみに佐藤とは管理人の名字ね、

「佐藤さん、空いてる布団とがあります?」

「あるけど……何かあったの?」

「いや、前使ってたバカでかいベッドを引き取ってもらったので代わりに使おうかなと。」

「そういうことが、いっぱいあるから好きなだけ持っていていいよ。」

「わかりました、」

まあ一つしか持っていないけど。まああってよかったな、

「よっこらせっと、」

布団を運び先に2人分の布団を敷いておく。雪はまだ寝てるみたいだ、

「雪が寝てる間に飯でも作るかな。時間的に炒飯ぐらいしかできないけど、」

「ん……」

「雪?おきたか?」

ちょうど作って皿に盛り付けたところで雪が起きた。寝たふりじゃなかったのか。

「どこどこ？」

「家だ家、お前保健室で寝てただろ。猫耳だして」

「えへへ。眠くなっちゃって、」

「そこらへんは猫だな…飯作ったから先に食べてる。俺は風呂入ってくる」

「はい。」

「ふう、さっさと飯食ってねるか。」

ただいま午後9時30分、飯食って片付けをしても10時は回るな。忙しいったらありゃしない。

雪は既に歯磨きを済ましソファでゴロゴロしている。

「あ、終わった？」

「おう、ついでに歯磨きもな。」

「じゃあ一緒にゴロゴロ……」

「その前に宿題だ、早く終わらずぞ。」

「はい。」

というわけでしばらく宿題。基本授業を聞いてれば大体はできるが、英語とか社会は別。暗記をしなきゃいけないからかなりめんどい。雪はもうダウンしてる

アドバイスもしなんとか終わった。午後11時回ったな…いかん、眠くなってきた。

「終わったー。眠たい…」

「俺もだ…布団はもう敷いてあるから寝るか？」

「うん…って結局布団あったの？」

「ああ、あってよかったわ。」

「だね。それじゃ寝よー」

「ああ、おやすみ。」

翌日、放課後

「あー、練習に入る前に連絡がある。待望の新人部員だ。来てくれ」

お、ついにきたか。さてさつどんなやつかな？

「えと、中川勇です。下手くそですがよろしくお願いしますー！」

「藤原巧です。よろしく！」

「だ、そうだ。よろしく頼むぞ。」

勇はおどおどしててなんか自信が無さそうな感じ。見た目は癖っ毛で145cmぐらい。

巧は逆に自信満々な雰囲気。自信過剰にならないければいいが…まあ悪いって訳じゃ無いが、黒の短髪で150cm弱といったところ。

「優生さん！あの子誰っすか？」

勇が指差した先には雪の姿か。そっぴやあいつ今日もいるっていつてたな、

「ああ、雪のことか。どうかしたのか？」

「雪さん……はうあ〜」

「……厚志、滝利、勇ってまさか……」

「多分あの子に一目惚れしたんだろうな。」

「確かに。まあ雪ちゃん髪とか綺麗だし運動もそこそこできるし性格いいし三拍子揃ってるよな」

「勉強はからっきしだがな。」

運動が出来るのは猫の名残だろうな。性格は知らんが…つか一応元野良猫だよな？



「んじゃ、アップしたら練習始めるぞー。」

そして部活が終わり雪と帰ろうとすると誰かに声をかけられた。

「優生先輩、おつかれっす！一緒に帰りませんか？」

話しかけてきたのは勇だ。大方雪目当てな気がするが。

「勇って小学生の時部活かなんかやってたの？」

「いや……まったくやってないです。見学にきた時の先輩のアタックに痺れちゃって。」

「ふーん。」

その後も話したがいたって普通だった。雪にも普通に話してたし、俺が気にしすぎか？

しかしまあなんかもやもやした感じの気持ちも微妙にあるっちゃあるんだが、まあ気にしないでいいか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5616r/>

---

擬人化物語

2011年10月8日02時15分発行